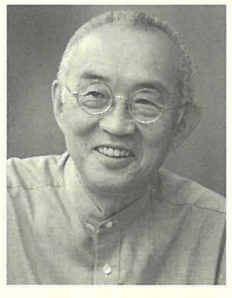
100年先を読む―⑮

環境問題に挑戦する レンタル商売

東京大学名誉教授
月尾嘉男



レンタル商売の隆盛

結婚や成人の儀式で衣装をレンタルするのは普通であるが、最近では宴席に招待された女性がハンドバッグをレンタルして利用することが流行している。数十万円もする高級ブランド商品が一週あたり二万円弱で利用できるということで人気であり、結果として、レンタルした商品を購入する女性も増加している。この商売はレンタカー、音楽のCD、映画のDVDなどでは五〇年近い歴史があるが、最近は意外な分野にまで浸透している。

一九八〇年代に登場した、マンションの一室を一週単位で賃貸する商売は日本の発明として成功したが、最近は一日単位に発展し、長期出張の社員や受験で短期滞在の学生に人気である。さらに家庭電化製品では、八種から五種を選択して、毎月三〇〇〇円強で賃貸する商売も登場している。丸々四年レンタルしても、一五万円程度であり、設置や修理の費用も貸主の負担であるから購入するよりも安価となり、利用する若者が急増している。

このようなモノだけではなく、最近はヒトにまでレンタル商売が拡大してきた。結婚の祝宴などで、親族が少数でつり合いがとれない場合、家族をレンタルすることも可能であるし、ウツ状態にある子供に手紙を送付し、面会して相談して更生させるレンタル兄弟姉妹という仕事も誕生し、一〇年間で七〇〇人程度が社会復帰している。これは便利というより、現代社会の問題の解決にレンタルという仕組みが役立っているということである。

レンタル全盛の江戸時代

このように紹介すると、レンタルという商売は、ここ数十年間に登場したようであるが、日本では歴史のある商売であり、江戸時代の都会では生活の大半がレンタルで成立していた。まず都会の庶民の住居は落語でお馴染みの賃貸長屋であり、武家や商家を例外として、風呂も湯屋といわれる公衆浴場を利用していた。食料や雑貨は近所の商店から購入するが、支払いは盆暮の二回のみで、日常生活ではレンタルしていたことになる。

江戸時代の教育水準は高度で、庶民は読書意欲があったが、新刊の書物は現在価格で五万円程と高価であったから、巡回してくる本屋の貸本を利用するのが普通であった。布団や蚊帳もレンタルするのが一般的であり、興味あるのは下帯さえレンタルしていたことである。当時、日常生活では下着をつけないのが普通であったようで、祭礼をはじめとするハレの場所に出向くときにはレンタルして格好をつけていたのである。

環境は子孫からのレンタル

レンタルには重要な意味がある。自宅の風呂に入浴する場合と湯屋を利用する場合を比較すると、一回の入浴あたり、前者は消費エネルギーが約一五倍になる。一年に数回しか使用しない衣服を購入する場合と必要なときにレンタルする場合を比較すると、前者は約五〇倍のエネルギーを消費することになる。書物を購入して読後は放置しておく場合と、貸本で何度も利用される場合を比較しても、後者はエネルギーを大幅に節約できる。

このような精神を拡大すると、新鮮な視点に到達する。世界各地の先住民族には、自然は創世の神々から貸与されたもので、そのまま子孫に手渡すべき環境をたまたま利用させてもらっているという思想がある。そこで環境の改造や濫用は禁忌とされ、実際、乾燥地帯に生活するアメリカインディアンは、数十キロメートルの近郊に大河があっても灌漑に利用しない。技術がないからではなく、精神として自然の改造を拒否しているのである。

化石燃料や鉱物資源の大半は一〇〇年程度で枯渇すると予測されている。これは地球の資源を自分が所有していると錯覚し、勝手に収奪してきた結果であり、子孫の困窮は無視している。問題となっている膨大な国債も返済するのは子孫だが、その借金で子孫には不要であろう道路やダムを建設し、環境を改造している。子孫からのレンタルという思想を導入すれば、金儲けを超越したレンタル商売が発想できるはずである。